



# ジオパークを核に 地域活性化



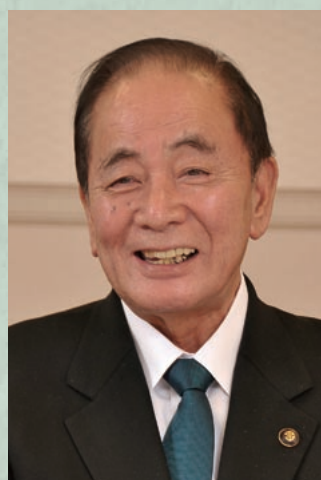
こまつ けんじ  
**小松 幹侍**  
むろと  
室戸市長(高知県)



つくだ ひろみ  
**佃 弘巳**  
いとう  
伊東市長(静岡県)



やまぎし まさひろ  
**山岸 正裕**  
かつやま  
勝山市長(福井県)



さと う いさむ  
**佐藤 勇**  
くりはら  
栗原市長(宮城県)

司会・コーディネーター

いのうえ しげる  
**井上 繁**

常磐大学コミュニティ振興学部教授

観光による地域活性化、郷土愛の育成などの観点から、近年、注目を集める「ジオパーク」。現在(平成25年11月14日)、国内の世界ジオパークは6地域、そして日本国内のジオパークとしては、26地域が認定を受けているほか、多くの自治体が周辺自治体と連携しながら、ジオパーク認定に向けて活動を進めています。

座談会では認定自治体、あるいは認定に向けて取り組んでいる佐藤勇・栗原市長、山岸正裕・勝山市長、佃弘巳・伊東市長、小松幹侍・室戸市長にお集まりいただき、取り組みの内容や課題、今後の展望などについてお話しいただきました。  
(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

## 「平成20年岩手・宮城内陸地震」で被害を受けた地域の復興に向けて、ジオパークの活用を進めています。



佐藤 勇  
栗原市長（宮城県）

### 全国の自治体で活発に進む ジオパーク活動

**井上** ジオパークは、独特な地層や地形など地質遺産を複数含む一種の自然公園です。ユネスコの支援により2004年に「世界ジオパークネットワーク」が設立されて以来、10年ほど経過しましたが、世界各国で関連の取り組みが推進されています。本日も登場いただいた中でも、

室戸市が世界ジオパークに認定されているほか、勝山市、伊東市は日本ジオパークの認定を受けています。それでは、まず認定を受けた各市の取り組みの概要についてお話しください。

**山岸** 勝山市は、貴重な地形や地質遺産を数多く持つ都市として知られています。中でも「恐竜化石」の産出量が日本一で、全国で発掘された「恐竜化石」の大部分が市内の手取層群の地層から発見され、本市が誇る最大の地域資源です。年間50万人以上が、「福井県立恐竜博物館」を訪れるなど、交流人口の拡大にも貢献しています。

さらに、市の中心部を流れる九頭竜川の右岸に位置する河岸段丘も、本市のまちの形成に大きな影響を及ぼした地質遺産にほかなりません。江戸時代には、「七里壁」ともいわれる、市内約20kmにわたって断続的に続く段丘崖を境に、上位段丘面には城郭や武家屋敷、下位段丘面には寺社、町屋が築かれるなど、城下町の整備にも活用されてきました。ほかにも、本市には火山活動により形づくられた、珍しい地層や岩石などの地質資源もあります。

勝山市では、こうした魅力的な地域資源を市内外に広くアピールし、活性化に生かそうと、日本ジオパークの加盟に向けた取り組みを推進し、平成21年には、本市全域を対象地域とした「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」が「日本ジオパーク」に認定されました。

現在は、将来的な世界ジオパークの認定も視野に入れつつ、ジオパーク推進協議会を構成する各種団体と協力しながら、子どもたちの教育普及やジオパークガイドの養成など、さまざまなジオパークにかかわる施策に取り組んでいます。

**佃** 伊豆半島は、世界的に見ても特異な地質を

有した半島です。その成り立ちも極めて独特で、もともと本州から数百km南にあった海底火山群でしたが、やがてフィリピン海プレートの上に伴い、火山活動を繰り返しながら本州に衝突。その後も噴火を繰り返し、約20万年前にほぼ今の形状が作りあげられました。現在でも火山活動や地殻変動が続いている影響で、半島内には各種の温泉や日本一深い駿河湾をはじめ、変化に富んだ地形や自然環境が、地域ごとに形成されています。

これらの資源をとりまとめて内外にアピールし、伊豆半島全体の振興に生かすことができなにか。そのような思いから、平成23年3月に、伊豆半島13市町と県、各種団体が加盟して設立したのが「伊豆半島ジオパーク推進協議会」です。以来、私も会長として先頭に立ちながら、各自治体と連携し、加盟申請書の取りまとめや、保全・教育・普及活動の推進に奔走した結果、平成24年秋には「日本ジオパーク」の認定をいただくことができました。



この日本ジオパークの認定を契機に、市民の関心も大いに高まっています。さらに、長泉町と清水町が新たに協議会の会員として加わることも決定しました。そうした後押しを受けながら、平成27年度の世界ジオパークネットワークへの加盟を目指してより取り組みを活発化させています。



**小松** 室戸市全域をエリアとした、わが「室戸ジオパーク」のテーマは「海と陸が出会い、新しい大地が生まれる最前線」。そのテーマの通り、室戸市には、海洋プレート沈み込みによる陸地の形成過程や地震による隆起など、約1億年前の白亜紀から現在にかけての、学術的にも貴重な地殻変動の痕跡が数多く残っています。さらに、珍しい亜熱帯植物や海洋植物の生息はもとより、空海が修行をした御厨人窟や捕鯨の伝統など、豊かな自然にはぐくまれた歴史や文化も根付いています。

こうした資源を持つ室戸市では、平成20年に「室戸ジオパーク推進協議会」を発足させて以来、行政、研究者、市民が一体となってジオパークの開発、ガイドの養成など、保護や活用に向けた取り組みを推進してきました。その努力が実って平成20年には日本ジオパークの認定を、平成23年9月に国内では5件目となる世界ジオパークの認定を受けました。

これを出発点に、さらなる活性化を目指そうと、現在、室戸市では協議会で3年ごとに策定する「実行計画」に基づき、地域遺産保護やジオツーリズム、拠点施設の整備などの取り組みを進めています。

**井上** 認定を受けた各都市とも、それぞれ特徴的な地質遺産を生かしながら、それらを積極的に活用されてきたことが分かりました。それでは、現在、認定に向けて取り組んでいる栗原市の取り組みについてご紹介ください。

**佐藤** 平成20年に発生した「岩手・宮城内陸地震」により、震度6強を観測した栗原市では、13名が亡くなり、6名が行方不明となるなど、甚大な被害を受けました。特に被害が大きかつ

たのは全長1300m、最大幅900mの山体が、約300mにわたって水平移動した「大規模な地すべり」です。そして、この地震の影響で発生した土石流が温泉宿を飲み込み、観光客を含めた7名が犠牲になりました。

こうした被害を受けた地域をいかに復興していくべきか。悩んだ末に、私たちが見出したのがジオパークの活用でした。あの地震で発生した大規模な地すべりや崩落地の地形・景観を、

自分たちが住んでいる  
大地の歴史を学びたい、  
ルーツを知りたい  
という市民は確実に  
増えています。



山岸 正裕  
勝山市長(福井県)

防災教育や学術研究、さらには観光に活用しよう、復興に結び付けようと考えたのです。

幸い、市内には栗駒山やこの山を源頭部とする迫川、ラムサール条約登録湿地の伊豆沼や内沼などの水資源、長屋門や古道といった歴史・文化資源など、ジオサイトとなり得る要素が数多くあります。そこで、平成24年7月に「日本ジオパークネットワーク」に準加盟、翌25年7月には、市や関係行政機関、観光関係者、商工会体、市民などが一体となって「栗駒山麓ジオパーク推進協議会」を設立しました。本日も集まりの中では、本市だけが、「日本ジオパーク」の認定を受けていませんが、平成27年の認定に向け、関係者や市民が一体となって関連の事業を推進しているところです。

**ジオパークが地域にもたらした  
さまざまな効果**

**井上** 各都市とも活発に取り組んでおられますが、そうした取り組み、さらにはジオパークの認定によって、どのような効果が地域に出ているのか、お聞かせください。

**小松** 最も大きな効果は、経済活性化です。世界ジオパークの認定を機に、平成17年には年間約17万人だった交流人口が、平成24年には約53万人へと3倍以上も増加しました。認定に加えて、観光施設の磨き上げなど、多様な取り組みを行ったことによる複合的な成果でしょうが、まさににぎわいと活力が増しているのはうれしいことです。

**山岸** 本市でもジオパークを活性化につなげようと、関連グッズの製作を進める動きも出ています。全国公募で公式ロゴマークもつくり

ましたから、さらにその動きを促進していきたいですね。市としても、商品化はしていませんが、ロゴマーク入りの市内の地下水を使用した500mlペットボトル水を製造し、ジオパークツアーや市内外で行われる各種イベントなどで配布するなどしています。

**佃** 伊豆半島内でも、既に各企業がジオパークを活用した振興策に取り組んでいます。その一つが認定ジオガイドが開発、製作したジオ菓子です。各ジオサイトの特徴をパイやパウンドケーキ、クッキーなどで表現し、実際に売り出しています。新しい特産品になればと期待しているところですよ。

**佐藤** まだ認定を受けていませんから、活性化効果はこれからという状況ですが、取り組みを進める中で、さまざまな効果が現れています。その一つが、まちの一体感の醸成です。本市は合併して9年目ですが、旧自治体ごとに独自の地域性があり、なかなか一つにまとまることできませんでしたが、日本ジオパークへの認定という大きな目標に向かって各種取り組みを行う中で、新市としての一体感が生まれてきました。

**佃** 市内の一体化もそうですが、ジオパークエリア内の周辺自治体との連携が深まったことも大きな成果です。これまでは静岡県市長会を通じて、市長同士のつながりをはぐくむ機会があったものの、町との連携を深める機会はほとんどありませんでした。しかし、ジオパークの取り組みの一環として、半島内の市町の首長会議(サミット)などを継続的に行う中で、お互いの交流が活発化してきました。こうした横のつながりは、ジオパークに限らず、今後さまざまな行政課題を解決する上でも、大きな意味を

ジオパークの取り組みを通じて、  
周辺自治体との連携が深まり、  
お互いの交流が活発化した  
のは大きな成果です。



佃 弘巳  
伊東市長(静岡県)

持つてくるように思います。

**佐藤** 栗原市でも、栗駒山周辺の3市1村(湯沢市、一関市、東成瀬村)で観光協定を結んでいます。中でも既に日本ジオパークに認定されている湯沢市とは、双方のジオガイド養成講座やガイド検定、ジオパーク講演会、視察研修など、さまざまな事業で連携しています。将来的

には、一関市や東成瀬村などを含めた、広域的なジオパークを形成し、世界に発信していきたいと考えています。

また、東日本大震災で甚大な被害に見舞われた、青森、岩手、宮城の3県にまたがる三陸沿岸地域が、平成25年9月に「三陸ジオパーク」として日本ジオパークに認定されました。互いに「復興への思い」を強く持つ自治体同士として、同ジオパークともガイド養成講座や視察研修などで事業協力をしています。

**山岸** 確かに周辺の自治体と広域的につながり、同じ目標の下に一体的な取り組みを行う意義は、大きいものがありますね。勝山市でもジオパークではありませんが、白山市をはじめとした3県6市1村が連携して、「霊峰白山と山麓の文化的景観」の世界遺産登録に向けた取り組みを進めています。

**小松** 室戸市でも、これからは国内外を問わず、ジオパーク認定自治体との姉妹都市提携を行っていききたいですね。お互いに協力すべきところは協力し、切磋琢磨しながら、ジオパークを活用したまちづくりを進めていければと思います。

### ジオパーク活動を支えるのは 市民の意識と行動力

**井上** ジオパークに関連した活動を効果的に展開するためには、行政だけの取り組みでは不十分です。市民との協働が必要になると思います。が、いかがでしょうか。

**小松** 当初はジオパークで市が活性化できるはずがないとの考えが市民の間に根強くあったようです。「石で飯が食えるか」という声が上がったほどですから。しかし、徐々に意識改革が進





小松 幹侍  
室戸市長(高知県)

世界ジオパークの認定を機に、  
交流人口も3倍以上に増加。  
地域経済への活性化効果が出ています。

み、多くの市民が活動に参加するようになりまし  
た。

平成24年11月に、室戸市を会場に開催された  
第3回日本ジオパーク全国大会では、市内の各  
団体の関係者が実行委員会に加わり、大会の運  
営に参画したほか、400名ものボランティア  
が訪問客のおもてなしに当たりました。多くの  
お客さまから、「室戸市の一番の資源は人材です

ね」と高い評価をいただいたときはうれしかった  
です。

**山岸** 各家の家系はせいぜい5代前ぐらいまで  
しかさかのぼることができないのが普通ですが、  
地形や自然環境の歴史は2億年、3億年レベル  
でたどることができる。いかにもスケールの大  
きな話ですが、そこが魅力なのでしょう。自分  
たちが住んでいる大地の歴史を学びたい。ルー  
ツを知りたいという市民は確実に増えています。

さらに、勝山は「七里壁」という形で、その地  
質資源をまちづくりにも活用してきた歴史もあ  
ります。丹念に大地の歴史を調べる中で、先人  
の知恵を学ぶこともできるんです。市民の中で  
着実にまちへの誇りや愛着心が増えてきている  
ように思います。

**佃** 伊豆半島でもジオパークを通じて、自分た  
ちが住んでいるまちの成り立ちや自然に興味や  
関心を寄せる住民が増えてきました。ツアー企  
画や商品開発、清掃活動、ジオサイトの解説看  
板の設置などに従事するボランティアも少なく  
ありません。協議会が企画した「ジオガイド養  
成講座」にも毎年多くの方が受講していますし、  
室戸市で行われた日本ジオパーク全国大会に  
も、約30人の地域の皆さんが自費で参加して  
くれました。大変ありがたいことです。

**佐藤** 本市では昨年度、ガイドの育成と、ネッ  
トワーク構築を図るために、ジオガイド養成初  
級講座を開催しました。さらに、今年度は、そ  
の初級講座を修了された受講者や、既に観光ガ  
イドなどで活躍している方々を対象に、中級講  
座を開催しています。両講座とも各10回ずつ開  
催していますが、既に100名を超える方々に  
受講いただいています。



子どもたちへの  
教育が地域の  
持続的発展に  
つながる

**井上** ジオパークの  
活動の一つに位置付け  
られているのが「教育」  
です。息の長い取り組  
みにするには、児童、  
生徒への教育も重要  
になると思いますが、  
各地域ではジオパーク  
に関連して、どのよう  
な取り組みを行っていますか。

**山岸** 確かに地域の持続的発展を考えると次世  
代への教育が欠かせません。勝山市では、ジオ  
パークや自然環境などへの関心を高めてもらう  
ことを目的に、平成22年から市内の小中学生に  
向けて、体験授業などを柱にした「ジオパーク  
学習支援事業」を展開しています。ジオパークは  
子どもたちの関心も引きやすい教育素材ですか  
ら、子どもたちは夢中になって学習しています。  
**小松** 市内にある室戸高校では、平成23年度か  
ら「ジオパーク学」を開講し、地域の地質や歴史、  
観光などについて学んでいるほか、観光客に対  
してガイドも行っています。また、市内の小中  
学生に対しては、ジオパークの副読本を制作し、  
配布しています。

そうした教育の成果でしょうか。このほど、  
小・中・高校生に対して、アンケート調査をし  
たところ、ジオパークの認知度は93%にも及ん  
だほか、71%もの子どもたちが、ジオガイドを



井上 繁  
(常磐大学コミュニティ振興学部教授)

はじめ、ジオパーク活動に取り組みたいと答え  
てくれました。

**佃** 県立伊豆総合高校でも、総合学科の全生徒  
が平成23年度から総合的な学習の時間を利用して、ジオパーク構想を取り入れた学習活動を展  
開し、生徒が企画運営するジオツアーや小学校  
への出前授業、学習会などが活発に行われてい  
ます。さらに、小中学生に対しても郷土の歴史  
や文化、風景について親しんでもらおうと、市  
内の代表的な景勝地「伊東八景」の学習なども進  
めています。

**佐藤** 栗原市は震災により大きな被害を受けた  
地域ですから、ジオパークについての学習の一  
環として、防災教育についてもこれまで以上に  
力を入れたいと考えています。

**佃** 同感ですね。伊豆半島は海に囲まれていま  
すから、巨大地震が起これば、大きな津波被害  
の発生が懸念されています。その地域の大地の  
成り立ちを理解した上で、いかに逃げるかとい  
う問題も含めて、子どもに限らず、市民全体を  
対象に、防災教育も充実させていきたいと思っ  
ます。

## 今後の課題は ジオパークに対する国の支援体制

**井上** それでは最後に、ジオパークの活動をさ  
らに積極的に推進する上でのこれからの課題、  
さらには展望についてお話しください。

**佐藤** ジオパークは、行政だけでなく、市民や  
関係機関、民間企業などさまざまな協力が必要  
ですが、活動を軌道に乗せるまでは、とりわけ  
市の役割が大きいと考えています。そこで、市  
の組織強化として、担当部署を「ジオパーク推  
進室」に格上げしたほか、担当職員には「5年間  
はひたすらジオパークの取り組みに専念して、  
成果を出してほしい」と激励しています。

**山岸** 市内には、ジオサイトになり得る多くの  
素材があります。それらを市民自ら発見し、磨  
き上げ、観光誘客まで結び付ける。そのような  
自発的な取り組みが推進されてほしいですね。  
それが必ずや協働のまちづくりにもつながるも  
のと考えています。

**小松** 現状では、ジオパークの取り組みは地方  
主導の取り組みです。それ自体は望ましいこと  
ですが、国外の例と比べると国の支援が不足し  
ているようにも思います。もう少し国の力添え  
を得て、ジオパークの施策を強力に推進する仕  
組みをつくることも必要ではないでしょうか。

**佃** 同感です。伊豆半島でも、静岡県への支援は  
充実していますが、国の支援はまだ十分とは言  
えません。国の出先機関の職員との交流は図れ  
つつありますが、制度的な支援体制はこれから  
の課題です。

**佐藤** 確かに国の支援は必要ですが、所管の部  
署ができること、とたんに国の縛りがきつくなっ

て、自治体のアイデアや施策を貫けるのか心配  
な面もあります。個人的にはある程度フリーハ  
ンドで、柔軟に施策を進めながら、地方交付税  
で財政措置をしてもらえればと思います。い  
ずれにせよ難しい問題であることは確かです。  
**井上** 地球が誕生して46億年ともいわれます  
が、その「地球」の魅力をいかに発見するか。結  
局のところ、ジオパークの活動はここに行き着  
くのではないかと感じました。人間と自然のか  
かわりという、人間活動の原点に立ち返りなが  
ら、悠久の歴史の中で培われた、その地域なら  
ではの地質遺産をよく理解し、それを守り、生  
かしていく。各都市とも知恵を凝らしながら、  
市民や周辺自治体をうまく巻き込んで、活発に  
活動しているのが印象的でした。今後も、ジオ  
パークを活用して、さらに各市の活性化に結び  
付けてほしいと願っています。本日はどうもあ  
りがとうございました。

(平成25年11月14日、全国都市会館にて実施)  
本コーナーは隔月掲載となります。次回は3月号に掲載予定です。



